

林 重雄<sup>1</sup>：愛知県渥美半島にヒルギ類の漂着Shigeo HAYASHI<sup>1</sup> : *Kandelia obovata* Sheue, H. Y. Liu et W. H. Young and *Rhizophora stylosa* Griff stranded on the beach of Atsumi Peninsula, Aichi Prefecture, Japan

メヒルギ *Kandelia obovata* Sheue, H. Y. Liu et W. H. Young は、メヒルギ科メヒルギ属の常緑木本植物で主に海岸湿地に生える。オヒルギ、オオバヒルギとともに日本のマングローブ林を作る主要な植物である。主に熱帯から亜熱帯にかけての河口に生育し、マングローブ林の構成樹種の中でも高緯度に繁殖する種である（瀬戸口 2016；北村・村田 1971）。日本での分布域は八重山諸島、沖縄本島、徳之島、種子島、屋久島、そして鹿児島県喜入町が北限となる（中西 1994）。また、メヒルギの植栽は本州でも行われており、静岡県南伊豆町湊の青野川河口では1959年より種子島から苗を運んで植栽が始まり、その後も続けられ、定着している（末松・水戸 2004）。

オオバヒルギ *Rhizophora stylosa* Griff は、ヤエヤマヒルギとも言い、ヒルギ科オオバヒルギ属の常緑木本植物で主に海岸湿地に生える。東アフリカから南アジア、オセアニアの熱帯および一部の亜熱帯に広く分布し、日本の分布域は八重山諸島から沖縄本島までとなる（瀬戸口 2016；北村・村田 1971）。

渥美半島に位置する田原市の太平洋側には砂浜海岸が連続し、豊橋市との境界から伊良湖岬までは、東西約30kmになる（田原市 2008）。太平洋に面する海岸一帯は、初夏から秋にかけ漂着物が打ち上げられるシーズンとなる（林重雄ブログ）。今回本州中部の愛知県田原市と豊橋市の海岸でメヒルギとオオバヒルギの漂着を確認したのでここに報告する。

## 漂着記録

筆者は2017年7月22日、愛知県田原市大草海岸（図1）で漂着物の調査中にメヒルギ（図2）を確認した。

発見時（午後4時）の天候は晴れ、最寄の伊良湖岬のデータによれば気温30℃、南東の風、風速4.5m/sであった（気象庁ホームページ）。メヒルギは大草海岸の高潮線上に、他の漂着物と一緒に漂着していた。メヒルギ果実の全長は143mmで、その上先端部に12mmの芽が出ており、最大直径は9.5mmであった。果実の表面の色彩は、やや緑味が強い黄緑色をしており、平滑で痛みも見られなかった。また表面の一部にはコケムシ類の付着痕跡も見られた。メヒルギ果実の漂着に随伴して見られたものは、アマモ、コアマモ、ギンカクラゲ、カツオノカンムリ、それに中国やベトナムのペットボトルであった。

また2017年8月21日、同じく渥美半島にある愛知県豊橋市伊古部海岸（図1）でも、漂着物調査中にメヒルギとオオバヒルギ（図3）を確認した。発見時（午前9時）の天候は晴れ、最寄の伊良湖岬のデータによれば気温29.3℃、南東の風、風速3.6m/sであった（気象庁ホームページ）。どちらも海岸の高潮線上に、他の漂着物と一緒に漂着していた。メヒルギ果実の全長は138mmで、その上先端部に14mmの芽が出ており、最大直径は7.4mmであった。果実の表面の色彩は、やや緑味が強い黄緑色をしており、平滑で痛みも見られなかった。オオバヒルギ果実の全長は204mmであったが、下部で一部欠損しており、最大直径は11.3mmであった。果実の表面の色彩は、やや褐色気味な黄緑色をしており、表面には上部で縦に皺、中部以下には縮緬状の模様が見られ、

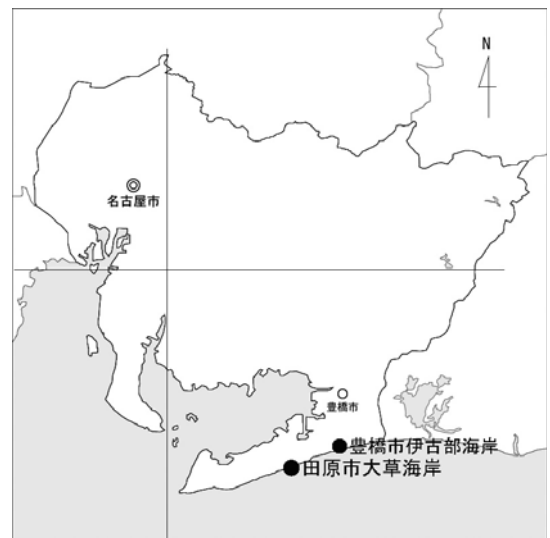


図1 愛知県田原市大草海岸と伊古部海岸の位置



図2 田原市大草海岸に漂着したメヒルギ



図3 豊橋市伊古部海岸に漂着したメヒルギ（上）とオオバヒルギ（下）

全体に柔らかく萎れていた。随伴して見られたものにはゴバンノアシ、シナアブラギリ、ココヤシ、テリハボク、ミフクラギといった南方系果実や種子があった。

## 考察

これまでに分布域を除いた地域でのヒルギ類の漂着は少なく、山口県でオオバヒルギ (中西 1990)、福岡県でオヒルギ (石井 1999)、和歌山県でオオバヒルギ (久保田ほか 2008) の漂着が報告されているだけである。愛知県の渥美半島で南方系果実や種子が700個以上確認できた2012年夏から秋にかけての漂着種子大量漂着時にもヒルギ類の漂着は確認できず (はやししげお 2013)、短期間にヒルギ類3個体の漂着は極稀な例と考えられる。海洋情報部ホームページによれば2017年7月中旬の黒潮は、潮岬に接近後に大きく蛇行し房総半島沖で接近後は再び蛇行をしていた。そのために渥美半島の太平洋側へカツオノエボシなどの南方系の漂着物が漂着し始めたのは7月中旬であった。

メヒルギの表面にはコケムシ類の付着痕跡も見られるが、その漂流期間は不明である。黄緑色を残したヒルギ類の漂着は、ヒルギ類を運ぶ海流の速度が高いことや、散布地が遠くないことを考えさせる。夏季の遠州灘の沿岸流は東から西へと流れる傾向があり (第四管区海上保安本部ホームページ)、海流の流れを考慮すると、メヒルギの散布地は九州以南の自生地と、遠州灘の東に位置する静岡県南伊豆町との可能性が考えられる。静岡県南伊豆町では、特異な植物景観造成をめざし伊豆の公園化のために植栽された。また1999年時点で高さ2mを超すメヒルギが400本以上あることは、南伊豆に定着しているものと考えられ (末松・水戸 2004) 散布量は不明だが特記しておく。

オオバヒルギはやや萎れた状態で漂着したが、それでも黄緑色を保っていた。このような産状から、黒潮に乗って沖縄本島以南の自生地からやってきたと考えるのが妥当であろう。

愛知県の渥美半島の太平洋側では、これまでに漂着物調査を続けてきたが、今後も継続的な調査を続け、黒潮の影響が強い夏季の漂着物に注目することで、植物の生態や分布に関する新たな知見が得られるであろう。

**謝辞:** 本稿をまとめるにあたり漂着物学会会長の中西弘樹氏には、メヒルギの情報をいただき、オオバヒルギの同定でご助力いただいた。北海道教育大学札幌校の鈴木明彦教授には、粗稿を見ていただいた。森川愛子氏には調査をお手伝いいただいた。ここに記してお礼申し上げる。

## 引用文献

- 海上保安本部 海洋情報部ホームページ. (<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAIYO/qboc/2017cal/cu0/qboc2017137cu0.html>) (2017年7月26日閲覧)
- 第四管区海上保安本部ホームページ 遠州灘と伊勢湾の流れ特徴. (<http://www.kaiho.mlit.go.jp/04kanku/safety/leisure/000046.html>) (2017年7月26日閲覧)
- はやししげお 2013. 2012渥美半島漂着ブレイク・その傾向と対策, *どんぶらこ* 46: 4-6.
- 林 重雄 ブログ. Beachcomber's Logbook (<http://beachcomb.exblog.jp/>) (2017年7月28日閲覧)
- 石井 忠 1999. 新編漂着物事典, 380pp. 海鳥社, 福岡.
- 気象庁ホームページ. (<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>) (2017年7月26日閲覧)
- 北村四郎・村田 源 1971. 原色日本植物図鑑・木本編 I. 453pp. 保育社, 大阪.
- 久保田 信・榎山嘉郎・中西弘樹 2008. 和歌山県白浜町番所崎およびその近隣海岸へ夏季の短期間に集中漂着した熱帯起源の植物散布体. *漂着物学会誌* 6: 25-26.
- 中西弘樹 1990. 海流の贈り物・種子散布の生態学, 255pp. 平凡社, 東京.
- 中西弘樹 1994. 種子はひろがる・漂着物の生態学, 254pp. 平凡社, 東京.
- 瀬戸口浩彰 2016. ヒルギ科 RHIZOPHORACEAE. 改訂新版 日本の野生植物 3. Pp145-146. 平凡社, 東京.
- 末松信彦・水戸喜平 2004. 南伊豆町湊の青野川河口に生育するメヒルギの特性. *静岡県農業試験場研究報告* 49: 51-62.
- 田原市 2008. たはらの海辺の博物誌. 95pp. 田原市, 愛知.

(Received Sep. 5, 2017; accepted Sep. 30, 2017)

<sup>1</sup> 〒486-0844 愛知県春日井市鳥居松町3-155

<sup>1</sup> 3-155 Toriimatsu-cho, Kasugai City, Aichi 486-0844 Japan